7 月 9 日のメッセージ

聖書：使徒言行録　20：　7 – 12

「まだ生きている」

「生きているだけで、丸儲け」は、タレントの明石家さんまさんの座右の銘です。娘の名前をここから取ったことでも知られています。他にも、「命あっての物種」「死んで花実が成るものか」など、「命」をテーマにした格言は多くあります。

当たり前のことですが、私たちは命を与えられ、「今」を生きています。その命を大切にしたいと思うことは当然のことでしょう。しかし、その命が取り去られたとしたら。しかも、自分ではなく、自分が大切にしている人の命が、自分よりも先に失われたとしたら。その悲しみは「大きい」という言葉で表現しきれないほど大きいことでしょう。

ナインという町のやもめが一人息子を失ったとき、イエスは「もう泣かなくてよい」と言われました(「主はこの母親を見て、憐れに思い、『もう泣かなくともよい』と言われた。」ルカによる福音書 7:13)。そして、その命を取り戻されました(「そして、近づいて棺に手を触れられると、担いでいる人たちは立ち止まった。イエスは、『若者よ、あなたに言う。起きなさい』と言われた。すると、死人は起き上がってものを言い始めた。イエスは息子をその母親にお返しになった。」ルカによる福音書 7:14-15)。

しかし、私たちを取り巻く現実は、そのような奇跡を期待させないほどに厳しいのもまた事実です。

『活きる』(1994 年)という映画があります。かの有名な黒澤明監督の『生きる』(1952 年)ではなく、中国の張芸謀(チャン イーモウ)監督の作品で、1940 年代から 1960 年代までを生きた、とある家族の姿が丁寧に描かれています。

主人公夫婦は、夫の賭博で家屋敷を失いますが、共産主義政権に代わった結果、人民裁判にかけられずに済みました。しかし、貧しいながらも楽しく暮らしている中で、息子を事故で失ってしまいます。しかも、事故の相手はかつての仲間だったという皮肉。そこから立ち直り、唯一成長した娘が結婚して幸せをつかんだかに見えた矢先、今度はその娘を出産時の医療ミスで失うことになります。それでも、残された孫息子と共に、淡々と生きていく、というシーンで映画は終わります。

劇的な奇跡はありません。ただ現実に立ち向かい、しっかりと生きていく中で、守られたり、助けられたり、苦労したりの繰り返し。「死なないうちに、水溜めから引き上げるがよい」と命じてくれる王もいません(「王はクシュ人エベド・メレクに、『ここから三十人の者を連れて行き、預言者エレミヤが死なないうちに、水溜めから引き上げるがよい』と命じた。」エレミヤ書 38:10)。

それでも、生きていく。与えられた命を「活かして」生きていくのです。

パウロの説教中に 3 階から落ちたエウティコという青年は、どんな人生を歩んできたのでしょう(「エウティコという青年が、窓に腰を掛けていたが、パウロの話が長々と続いたので、ひどく眠気を催し、眠りこけて三階から下に落ちてしまった。起こしてみると、もう死んでいた。」使徒言行録 20:9)。また、落ちたとき、やはり神の助けを願ったでしょうか(「わたしに追い迫る者の前に／槍を構えて立ちふさがってください。どうか、わたしの魂に言ってください／『お前を救おう』と。」詩編 35:3)。

「騒ぐな。まだ生きている。」(使徒言行録 20:10)

そして、一度は失われたと思われた命がつながれたとき、どう生きようと決意したのでしょう。おそらく、もう一度奇跡を期待して派手に生きるのではなく、与えられた、回復された命に感謝しながら、淡々と毎日を生きたのではないでしょうか。回復されてそのまま礼拝に参加し続けた事実が、その未来を予見させます。どのような毎日であったとしても、全ては神の守りのうちにあることを確信して生きたことでしょう。

「もうだめだ」と諦めたら、それで終わりです。せっかく与えられている命なのだから、精一杯「活かす」私たちでありたいと願うのです。